

レクチャーコンサートとその「語り」 についての一考察 —アートマネジメントの実践から—

横浜国立大学大学院 環境情報学府

博士課程後期 長谷川倫子

A View on Lecture Concerts and
their Narratives
—From the Practice of Art
Management—

Noriko HASEGAWA
Graduate School of Environment and
Information Sciences, Yokohama
National University

要旨

本稿では、音楽解説などの語りがある「レクチャーコンサート」について、自らのアートマネジメントの実践を通して検討した。クラシック音楽中心のレクチャーコンサート「とよたクラシック音楽同好会」の企画、運営で提供してきた例会をふり返し、特に「語り」に注目し、「音楽をことばで語ること」について考察した。研究方法は、実践でのVTRをいくつか選択し、その中の「語り」の部分の時間配分や内容、語り方などを分析した。レクチャーコンサートにおける「語り」には、音楽の解説のみならず、語り手の音楽への思いや考え方、人生経験なども表現されていた。また、聴衆と演奏者それぞれの視点におけるレクチャーコンサートについての意見から、「語り」のあるコンサートが両者にとって意義あるものであると考察できた。

SUMMARY

This paper examines lecture concerts that feature a musical commentary based on the author's experiences in art management. Reviewing regular sessions of Toyota Classic Music Club ("Toyota Kurashikku Ongaku Doukoukai") lecture concerts centering on classical music, to which the author contributed in terms of planning and operation, the nature of explaining music with words, with particular focus on the narratives, was examined. The investigation method consisted in selecting a number of VCR tapes of actual events, and analyzing the time allocation and contents of the narrative portions, the narrative method, and so on. The narratives in the lecture concerts included not only explanations of the music, but also the narrator's feelings and thoughts toward music, his/her life experiences, and so on. Based on views about lecture concerts from the respective perspectives of the audience and the performers, a conclusion was drawn that concerts accompanied by narratives are meaningful for both the audience and the performers.

1. レクチャーコンサートについて

1.1 研究の背景

私たちが音楽を聴く機会のひとつにコンサートがある。コンサートとは、一般聴衆を対象として音楽を演奏する催し、つまり公開演奏会である⁽¹⁾。コンサートには、聴衆を前にした生演奏（ライブ）の他に、CDを流したり、映像を伴ったコンサートもある。

クラシック音楽の生演奏のコンサートの場合、一般的には、演奏のみに終始することが多い。司会者等が演奏者の紹介や曲の題名を知らせる場合もあるが、それ以上の解説は入らない。従来のコンサートでは、演奏者、曲目などの情報は、ほとんどがパンフレットやプログラムから得るものであった。現在も、この形態のコンサートが主流を占める。

しかし、この10年間くらいで、講義・解説を伴う「レクチャーコンサート」が増加してきた。まだ演奏会形式の主流にはなっていないが、インターネットで「レクチャーコンサート」を検索すると、119000件もヒットする⁽²⁾。多くがレクチャーコンサートへの案内であるが、それだけ需要があると思われる。特に低迷

しているクラシック音楽界において、レクチャーコンサートの役割は大きくなってきており、クラシック音楽ファンを増やすためには必要なものとなりつつあるのではないか。

そして、このような新しい形のレクチャーコンサートについて研究することは、今後のコンサートの発展のために役立つであろうと考えられる。

1.2 研究の目的

全国でレクチャーコンサートは多数行われているが、研究に関していえば、その内容について分析した研究はほとんど報告されていない。先行研究として、「レクチャー・コンサート・シリーズに見出す、いくつかの文化的問題」（二宮2005）という文献がある。著者が企画したレクチャーコンサートの経緯や内容、観客の反応、そこから見える文化的問題を考察している。しかし、レクチャーコンサートそのものを詳細に分析している研究ではない。

そこで、本稿において、筆者がアートマネジメントの実践として行ったレクチャーコンサートについて調査する。特にレクチャーコンサートの大きな特徴であ

る「レクチャー（語り）」について分析、考察をすることを研究の目的とする。

1.3 レクチャーコンサートの定義・種類

レクチャーとは講義、講演、説明という意味である。つまり「レクチャーコンサート」とは「講義や解説を伴ったコンサート」と訳せる。しかし、どの国語辞典や音楽辞典、現代用語の基礎知識等にも「レクチャーコンサート」という用語は掲載されていない（2009年8月現在）。また、インターネット検索では数多く「レクチャーコンサート」がヒットするが、それらには、クラシック音楽だけでなく、ポップスやジャズ、民俗音楽、邦楽なども含まれていた。

多くの事例調査⁽³⁾から、レクチャーコンサートは次の①～⑤のようないくつかのパターンに分けられた。

- ① 生演奏（ライブ）において、演奏者自身がレクチャーをする。
- ② 生演奏（ライブ）において、演奏者とは別に、司会者や専門家がレクチャーをする。
- ③ 生演奏（ライブ）において、演奏者と司会者または専門家が会話しながらレクチャーする。
- ④ 聴衆を前に、CDやDVD、VTRなどで音楽を鳴らしたり映像や文字を見せ、そのレクチャーをする。部分的に生演奏が入る場合と全く入らない場合がある。
- ⑤ テレビやラジオ番組で音楽や映像（文字も含む）を流し、そのレクチャーをする。例としてNHKのテレビ番組「N響アワー」、ラジオ番組「名曲のたのしみ」などがある。テレビ朝日「題名のない音楽会」は、③と⑤に該当する。

また、レクチャーの内容についても、楽曲や作曲家、音楽史の講義、解説だけでなく、レクチャーする人の感想や体験談、裏話などが含まれる場合もよくある。ただし、語りの部分において、個人的なことのみで、音楽的な解説を伴わないものはレクチャーコンサートとは言えないのではないか。

2. アートマネジメントの実践

2.1 アートマネジメントについて

アートマネジメントとは、「芸術作品を鑑賞者に提供するために、企画、立案から運営に携わる仕事」⁽⁴⁾と一般的に言われるが、さらに進んだ次のような定義もある。アートマネジメントとは、「芸術・文化と現代社会との最も好ましいかわりを探求し、アートの

なかにある力を社会にひろく解放することによって、成熟した社会を実現するための知識、方法、活動の総体」というものである⁽⁵⁾。アートマネジメントにおいて、社会におけるアートの役割や機能、存在のあり方を探求するという視点が重視されている。そしてその探求と実践がともにあるという点が今日言われるところの「アートマネジメント」の特徴である。その力点は「芸術と社会の関係」におかれ、演劇や美術といった個々のジャンル・形態のマネジメントというよりも、地域におけるアート・プロジェクトや文化振興、企業との協働、子どもへのアプローチ、ボランティア、国際交流といった視点に注目が集まる。そしてさらにその先には、「成熟した社会を実現する」という大きな目的も掲げられているのである⁽⁶⁾。

2.2 「とよたクラシック音楽同好会」の活動について

筆者は、愛知県豊田市において、「とよたクラシック音楽同好会」という音楽企画の幹事（現在4人）をボランティアでつとめている。この活動では、クラシック音楽のレクチャーコンサートを中心に企画・運営をしている。

「とよたクラシック音楽同好会」は、1995年に結成された。3年後のコンサートホール開設に向けて、市民にクラシック音楽を楽しんでもらおうという意図で始められた。設立当初は豊田市の要請で活動する予定であったが、行政の傘下での活動には制約が多くなり、自由な活動がしにくいと判断し、市からの援助を断り、全くの独立したチームで音楽活動が開始されたのである。

行政や企業のバックアップが無い自主活動には多くの困難が伴った。ほぼ月1回の例会（土曜日午後）を企画し、ホールを借り、講師を呼び、参加費ひとり1000円という安さで開催するのは至難の業であった。しかし、この活動に賛同する演奏家や研究者により、質の高いレクチャーやコンサートを提供することができ、参加者もそれを理解し、皆で会を作り上げていった。14年間で例会が117回を超えた現在（2009年7月）でも、このコンセプトは変わっていない。内容は主にクラシック音楽中心で、いろいろな楽器紹介と演奏、声楽、作曲家の勉強やオペラなどを、CD、映像をまじえてのセミナー、楽器博物館への研修、時には現代音楽や邦楽など、バラエティに富んだ内容であり、次第に毎回楽しみに参加する人が増え、最近ではかなり馴染みの音楽勉強会として市内に広がってきたようだ。

活動の結果として、例会の経験者は、その後、勉強

したことをもとにコンサートを聴きに行ったり、友人にも教えたりと、少しずつ市内の音楽人口が増えてきたという実感がある。中には、例会のレポートを書く参加者も登場している。また、活動内容が認められることにより、市との共同企画コンサート開催や企業からの会場提供などの協力も得られるようになった。

さらに、「とよたクラシック音楽同好会」の講師を新進音楽家が行った場合、音楽家の名前を広める効果もあり、音楽家と聴衆がともに育つ場を提供したということも成果と考えられる。

この活動には、地域における「芸術と社会の関係」が見出される。地域社会に生涯音楽学習の場を提供し、また、地域の音楽家にも演奏、発表の機会を提供している。まさに、地域発信型アートマネジメントである。

2.3 「とよたクラシック音楽同好会」の参加者について

毎回の例会の定員は約 60～70 名である。表 1 に例会参加者の年代分布を示す。(2008. 8 月アンケート調査)

表 1 年代分布 (男性 33 人女性 32 人)

		%
10代	0	0
20代	3	4.6
30代	1	1.5
40代	3	4.6
50代	16	24.6
60代	25	38.4
70代	12	18.5
80代	5	7.6
90代	0	0
計	65人	

次に、参加者の音楽活動とその経験年数を表 2 に示す。

表 2 参加者の音楽活動とその経験年数 (人数)

		人
ピアノ	45年(1)、40(2)、30(1)、15(1)、5(1)	6
ヴァイオリン	22年(1)	1
ヴィオラ	30年(1)	1
チェロ	20年(1)	1
ギター	10年(1)	1
フルート	3年(1)	1
トロンボーン	4年(1)	1
合唱	40年(1)、12(1)、8(1)、2(1)	4
計		16

また、例会への参加理由を表 3 に示す。

表 3 参加の理由 (複数回答可)

		%
音楽を楽しむため	57	31.7
内容が充実しているから	32	17.8
参加費が安いから	22	12.2
余暇を楽しみたいから	22	12.2
音楽の勉強のため	20	11.1
曜日や時間帯の都合がいいから	13	7.2
友人との交流のため	9	5.0
駅に近く便利だから	5	2.8
その他	0	0

以上、表 1～3 のアンケート結果から、参加者は 50～70 歳代の中高年齢層が多く (81.5%)、若年層が少ない。土曜日の午後という時間設定が、若い世代や子育て世代にはマッチしないのか、または、クラシック音楽に対する興味が少ないのかと考えられる。

参加者の中の音楽経験者は 24.6% で、ピアノと合唱が多い。アンケートをとった例会がピアノソロであったためと思われる。長年の例会全体を見ると、音楽活動の経験者はそれほどの割合を占めないと、会話などから推定される。

また、参加の理由は、「音楽を楽しむため」が目立ち、クラシック音楽を愛好する参加者は多い。「内容が充実しているため」は、演奏のみならず、レクチャーの内容への期待も大きいと思われる。

2.4 「とよたクラシック音楽同好会」例会の種類

「とよたクラシック音楽同好会」では、ほぼ毎月例会が行われているが、その内容はレクチャーコンサートが中心である。講師を依頼する時に、必ずレクチャーの部分を入れてもらうように要請する。これに応じてくれた人を講師に招くのである。ただし、記念コンサートなどの場合は、レクチャーのない従来のコンサート形式にしている。以下に、117 回分の例会を種類別と回数で示す。

例会の内容 (14 年間 計 117 回)

(1) レクチャーコンサート・・・計 98 回

- ① 生演奏によるもの・・・54 回
 - ・楽器 (管楽器、弦楽器、打楽器、電子楽器、和楽器)、アンサンブル (39 回)
 - ・声楽、オペラ、ミュージカル、合唱 (10 回)
 - ・作曲家、理論、ジャンル (5 回)

- ② CDや映像を中心としたレクチャーコンサート・・・44回
 - ・オペラ (13回) ・映画 (2回) ・旅行記 (3回)
 - ・SPレコード蓄音機 (11回)
 - ・作曲家、指揮者、演奏家 (11回)
 - ・音楽入門など (4回)
- (2) レクチャーコンサートではないもの・・・計19回
 - ① 記念演奏会、ガラコンサート、クリスマスコンサート (6回)
 - ② 見学会 (楽器博物館、プロのリハーサル見学) (7回)
 - ③ コンサートの予習会 (5回)
 - ④ 朗読 (1回)

以上の結果から、レクチャーを伴ったコンサートは計98回で、全ての例会の約84%を占める。その中でも、各種楽器やアンサンブルの生演奏とレクチャーが39回で、レクチャー全体の約40%と多い。これは、楽器を演奏する音楽家が多いという理由と、いろいろな楽器を知ってみたいという参加者の希望が多く寄せられるからである。また、映像を伴ったレクチャーコンサートでは、オペラに関するものが13回と多めである。これは、スタッフの中にオペラ研究家がいる、その人が講師をつとめているという理由が大きい。また、SPレコードや蓄音機のシリーズが11回というのも他にはない珍しい企画である。

3. 例会 VTR の分析

3.1 VTR の選択

「とよたクラシック音楽同好会」では、可能な限りビデオ録画をしている。その中から、なるべく種類の異なる7つの例会を選び分析・考察する。以下に各回のテーマと日時、また、演奏・レクチャーの形態、主な演奏曲目を示す。参加者は全て60～70人である。出演者・講師は主に芸大、音大卒業者で、Cは大学院芸術学専攻、Eは元音楽プロデューサーや蓄音機・SPレコード収集家であり、愛知県内での活動が多い。

A 第91回 『ソプラノの魅力』 2006.5.20

- ・ソプラノ演奏2名+ピアノ伴奏／レクチャーはソプラノ2名 (ピアニストも少し参加)
- ・「乾杯の歌」(ヴェルディ)「野ばら」(シューベルト)、日本の歌曲(「砂山」「この道」「ふるさと」他)

B 第99回 『弦楽四重奏の調べ』 2007.3.10

- ・弦楽四重奏 (4名) /レクチャーは1名 (チェリスト)
- ・①モーツァルトメドレー「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」「トルコ行進曲」他) ②映画音楽(「ムーンリバー」「ある愛のうた」他) ③懐かしのメロディ(「いい日旅立ち」「川の流れるように」他)

C 第103回 『あなたにも楽しめる現代音楽』

2007.10.13

- ・演奏 (ピアノなど) +レクチャーは1名、司会1名 (演奏に参加あり)
- ・「4分33秒」「トイピアノのための組曲」(ジョン・ケージ)「フィナーレ」(カーゲル)「ストラトヴェン」(フェラーリ)「アリーナのために」(アルヴォペルト) 他

D 第110回 『日本の叙情歌3』 2008.9.20

- ・バリトンソロ+ピアノ伴奏／レクチャーはソリスト
- ・「庭の千草」「ローレイ」「夢路より」「故郷を離るる歌」「ふるさと」「君の名は」他

E 第115回 『蓄音機・SPレコードの魅力 No.11』

2009.5.9

- ・蓄音機による演奏+映像 4名 (レクチャーは1名、他3名は映像、音響担当)
- ・1950年代の映画音楽特集 (全24曲)：①ヨーロッパが舞台の映画音楽(「八十日間世界一周」「第三の男」「禁じられた遊び」他) ②木下忠司の映画音楽(「喜びも悲しみも幾年月」他)、③アメリカ映画音楽(「エデンの東」「戦場にかける橋」「シェーン」他)

F 第116回 『フルートの魅力』 2009.6.13

- ・フルートソロ+ピアノ伴奏／レクチャーはソリスト
- ・「シチリアーノ」(フォーレ)「ソナタFDur」(ヘンデル)「ナイチンゲール」(ドンジョン)「歌の翼による幻想曲」(シュテックメスト)「ソナタ」(プーランク) 他

G 第117回 『音楽こぼれ話 名曲裏話』 ピアノ

2009.7.11

- ・ピアノソロ／レクチャーはピアニスト本人
- ・「練習曲第3・12・5番」(ショパン)「愛の夢第3番」「ラ・カンパネラ」(リスト)「ピアノのための9つの小品より」(コダーイ)「ルーマニア民族舞曲」(バルトーク)

表4 例会Fの流れ

0分	スタッフあいさつ・出演者登場	76:56	㊟ポルタメントについて いろいろな奏法について吹きながら説明
2:50	㊟「シチリアーノ」(フォーレ)	81:36	㊟ポルタメントの曲(現代曲:福島和夫)
6:39	㊟フルートについて説明・尺八について	83:06	㊟フルートの多様な表現について
13:20	㊟「春の海」(尺八・フルート)	84:21	㊟「ピーターと狼」(プロコフィエフ) 「鳥の曲」(メシアン)
16:14	㊟フルートの歴史(年表やCDを使用)	87:37	㊟CD「ダフニスとクロエ夜明け」(ラヴェル)、次 曲の説明
27:51	㊟クヴァンツのフルート 「ソナタFDur」(ヘンデル)	90:42	㊟「歌の翼による幻想曲」(シュテックメスト)
34:50	㊟クヴァンツとベームのフルートについて	94:45	㊟次曲の説明
45:34	㊟「ナイチンゲール」(ドンジョン)	96:43	㊟「天上のフルートより春夏」(安田芙充央)
49:10	㊟ドンジョンと「シランクス」(ドビュッシー) について	103:04	㊟プーランクとランパル(フルート奏者)について
53:34	㊟「シランクス」(ドビュッシー)	108:23	㊟ソナタ(プーランク)
56:23	スタッフの話(コンサート案内等)	120:43	出演者終わりのあいさつ スタッフの話(出演者への賛辞等) 次回例会案内
58:04	休憩(ティータイム)	125:39	終了
71:11	㊟出演者登場 フルートの種類・特殊奏法		
74:51	㊟「ソナタFDur」(ヘンデル)をピッコロで		

※ ㊟…演奏 ㊟…レクチャー

3.2 コンサートの流れと時間配分

(1) 例会A～Gの時間的流れをそれぞれ計測し記録した。紙面の都合上全ての例会を掲載できないため、Fについて示す(表4)。Fは演奏・レクチャーともに優れていたと聴衆・スタッフに評価された例会である。

(2) 次に、表4から個々に要した時間を順に並べる。
I演奏、IIレクチャー(語り)、IIIスタッフの話、
IV休憩(ティータイム)とする。

(例会F)

2:50	3:49	6:41	2:54	11:37	6:59	10:44	3:36	4:24
III	I	II	I	II	I	II	I	II
2:49	1:41	13:07	3:40	2:05	4:40	1:30	1:15	3:16
I	III	IV	II	I	II	I	II	I
3:05	4:03	1:58	6:21	5:19	12:20	4:56		
II	I	II	I	II	I	III		

(3) 例会A～Gの全てについて(1)(2)の作業を行い、演奏、レクチャー(語り)、スタッフの話、休憩時間それぞれを合計したものを、全体の時間における割合として表示した(表5)。例会は全体で120分間を原則としているが、少々の延長や短縮もある。休憩時間は13～20分くらいでとっているが、進行具合によって例会ごとに変動する。休憩時には、スタッフによる簡単なお茶を提供している。なお、演奏とレクチャーの時間配分については、企画者からの依頼はなく、全て出演者の裁量で行っている。

表5 各時間の割合(%)

例会	演奏	レクチャー(語り)	スタッフの話	休憩(ティータイム)
A	41.0	34.0	5.2	19.7
B	53.8	29.8	4.7	11.7
C	34.7	48.9	4.4	12.0
D	28.2	37.0	15.7	19.0
E	64.3	17.6	3.9	14.2
F	39.6	42.5	7.5	10.4
G	38.1	39.4	4.9	17.6

3.3 レクチャー(語り)の内容

各VTRの中で、講師のレクチャー(語り)の部分を中心にその内容をまとめる。

Aについて

出演者は、ソプラノ歌手2名とピアニストの3人で、独唱、二重唱、ピアノソロなどいろいろなパターンの演奏が行われた。レクチャーは、ソプラノ2人が交代、もしくは会話形式で行われ、1回だけピアニストによる語りが入った。レクチャーの内容は、前半がソプラノという声種、声質についての解説や実演、そしてそれぞれの曲の解説が中心であった。後半は、参加者への日本歌曲の指導であった。特に発音について強調された。また、同じソプラノ2人でコンサートをすることはかなり珍しいことなので、それが実現できたことに対する謝辞があった。

B について

この弦楽四重奏では、チェリストの男性が語りをした。前半がモーツァルトの曲、後半が映画音楽と懐かしのメロディという構成で、曲数が16曲と多かったため、レクチャーの割合が少なかった。後半の途中で、弦楽四重奏についての解説があったが、全体的には、ほとんどが曲の簡単な紹介にとどまった。しかし、時々、自分の気持ちが語りに表現され、会場の笑いを誘った。例えば、「私たち日本人にはモーツァルトよりこちら（美空ひばりの『川の流れのように』『おまつりマンボ』）の方がしっくりきますよね。」といった演奏者のつぶやきが印象的であった。

C について

横浜国立大学院生による型破りな例会であった。1人がメイン講師でレクチャーと演奏をし、もう1人（筆者）が司会や話の相手役、また演奏の手伝いをした。生演奏に加え、CDも使用しながらのレクチャーであった。ただ、現代音楽というなじみのない分野のため、解説が長くなったようだ。しかし、会話形式はメリハリができ、難しい内容でも退屈しにくく、また、レクチャー中、他の1人が会場をまわって楽譜や楽器を見せたりと、複数でレクチャーするメリットも見られた。「現代音楽のいいところは、演奏を間違ってもわかりにくいところです。」といったユーモアのある語りに笑いを誘った。

D について

日本の抒情歌の3回目という人気シリーズもので、バリトン歌手1名と伴奏者という組み合わせである。昔懐かしい唱歌や抒情歌のプログラムに合わせて、唱歌の歴史や各曲の解説があった。講師は68歳と歌手にしては高齢で、自称「前期高齢バリトン歌手」と呼び、「声が出るうち頑張ります。」という意気込みであり、聴衆の感心の的となっていた。学校の教師をしていたためか、解説だけでなく自身の思いを語ることもうまく、歌と時代背景の描写がリアルであった。そのため、時間配分はレクチャーの方が多かった。演奏時間が他の講師に比べ28.2%と短いのは、やはり高齢者というハンデのため、歌う曲数を控えていたからだと思われる。

E について

SPレコード⁽⁷⁾を蓄音機⁽⁸⁾で鑑賞するというコンサートで、今回で11回目になり、テーマは「映画音楽」であった。1950年前後の世界中でヒットした映画で使われた音楽ということで、60～80歳代には懐

かしい曲があり、音楽とともにその映画のパフレットやシーンを映像で映していた。コンサートは、SPレコードや蓄音機所有の4人が、語り、音響、映像の分担で行っていた。曲目が24曲と多かったため、時間の制約から講師のレクチャー時間が17.6%と少なかったようだ。しかし、各曲の間に語ることは、講師自身の青春時代を振り返り興味深いものが多かった。「シェーン！！カムバック！！」と演じてみたりして会場を盛り上げていた。日本映画では、会場の方から歌声が自然に湧いてきていた。

F について

女性のフルートソロと伴奏者でのコンサートで、フルーティストが語りをした。講師作成のレジュメが充実しており、フルートの歴史や奏法などを、実演やCDでこと細かにレクチャーしていた。各曲の解説も大変わかりやすく、自分の感想も交えながら、聴衆の立場に立った語りをしていた。演奏もよく知られているものから新しいものまで、演奏技術ともに充実しており、取材に来ていた新聞社の記事にも「出色の例会」と書かれていた。

G について

テーマは「音楽こぼれ話 名曲裏話」で、ショパンとリスト、コダーイとバルトークを対比させながら、それぞれの時代背景などの解説とともにピアノ演奏をするというコンサートであった。新しい視点でのテーマに、講師の前向きな取り組みがうかがえる。内容は、講師作成のレジュメをもとに語りが進められていき、音楽史的なものから、音楽史には載っていないコダーイ夫妻の裏話など、講師自身の留学話も織り交せて、大変興味深いレクチャーに仕上がっていた。演奏も充実しており、演奏会後に「感激した。話も興味深かった。」といった感想メールが寄せられた。

3.4 VTR「語り」分析の考察

まず、A～Gの例会において、「語り」を入れるタイミングは、表4のような、演奏とレクチャーがほぼ交互の場合がほとんどであった。最初のスタッフの話・講師紹介の後、演奏で始める場合と、挨拶・解説から始める場合とがあり、それは講師の考え方の違いではあるが、聴衆にインパクトを与えるという点からは、最初に演奏をした方が、より盛り上がるように感じられた。また、構成のまとまりごとに多めの時間を使ってレクチャーし、その後、関連した何曲かは簡単な解説で演奏を続けるパターンが多く見られ、音楽の

流れを止めない工夫もなされていた。特に例会Fのように、最後に時間の長い曲で締めくくる場合も聴衆に充実感を与え効果的であったと思われる。そして、ほとんどの例会においてアンコール演奏で終了する形をとり、演奏会を盛り上げていた。このように、レクチャーなどの「語り」を入れるタイミングや演奏曲の並べ方は、コンサートのまとまりを考える上で重要なポイントになると考えられる。

次に時間配分において、表5から、演奏時間の合計がレクチャー時間の合計よりも長かったものは、例会A、B、Eで、特に、BとEについては、かなり演奏時間が長い。これは、どちらも三部構成で演奏曲数が多く、制限時間内のレクチャーが縮小されたと考えられる。レクチャーも、大きく時間をとる場合は1回だけで、あとは曲目の合間に少しずつ紹介、解説するやり方であった。これらのケースは、演奏重視のレクチャーコンサートといえる。ただし、Eの場合は、音楽と同時進行で映像が映し出され、語りの時間が少ないのを補うのに十分なインパクトがあった。

反対に、レクチャーの方が演奏より長かったものは、例会C、D、F、Gである。特に、C、Dは差が顕著である。それは、Cの場合、現代音楽をテーマにしているため、馴染みのない曲目ばかりで、それらを解説するのに時間を要したからである。Dは演奏時間が短いため、必然的にレクチャーの時間の方が多くなるのだが、特記するところは、スタッフの話が長いことである。これは、3.3でも述べたが、講師が高齢なため、演奏曲数や語りの時間をなるべく短縮しようというスタッフの配慮であった。F、Gにおいては、演奏とレクチャーがほぼ同じくらいの割合でなされていた。このケースは、演奏とレクチャーの時間配分が前もってきちんと計算されたものと思われる。全体の構成がしっかりしており、聴衆にもわかりやすく質の高い例会であった。

そして、演奏やレクチャーの割合が、30～40%台に留まらない例会に注目したい。つまりどちらかが多いか少ないかが目立つ場合である。それには、B、D、Eが該当した。この3つの例会の講師は全員男性であった。他の例会は皆女性である。ここから推測されるのは、男性は時間の配分よりも、自分がやりたい演奏または語りのどちらかに集中しがちなものかもしれない。男性講師のレジュメは曲目のみが多い。語りは面白いが、その場で考えた言葉が多く、時に思いつきの曖昧な解説がないとはいえなかった。女性講師は、レジュメの内容も詳細で、時間も前もって測られており、準備万端で計画的に取り組むケースが多いように見受けられた。この7例だけでは全てを押し量れない

が、男女の性差、脳の違いがレクチャーコンサートにも表れているという結果になった。

また、語りを複数で行ったA、Cは、会話形式でそれぞれの個性が表現できたり、解説と客席への巡回が同時に行え、動きのあるレクチャーになったと思われる。

それぞれの語りの内容については3.3で具体的にまとめたが、全体的には多いものから、①曲の紹介、②楽器や演奏形態の解説、③作曲家や時代背景の解説、④曲に対する講師の感想・思い、⑤個人的なこと（青春時代の音楽体験、大学、留学時代のエピソードなど）、⑥質疑応答である。講師の何気ないひとことに、笑いが起きることがしばしば見受けられた。聴衆の反応に合わせて臨機応変に対応できるところが、レクチャーコンサートの良いところでもある。

レクチャー以外のスタッフの話は、前半（挨拶→講師の紹介）、後半（感想→謝辞→次回例会の案内、コンサートのお知らせ→終わりの挨拶）が大体のパターンである。時に、Dのような高齢の講師などの場合、疲れないように時間をかけて繋ぎをするなどスタッフが臨機応変に対応していた。

さらに、VTRにはおさめられていないが、休憩（ティータイム）では、スタッフが提供したコーヒーなどを飲みながら、親しい人や例会で出会った人たちで歓談する様子が見られた。内容は、身近なこと、個人的なこと、特に音楽に関することをが多い。時々、講師やスタッフも一緒に、例会の内容のなど音楽の話に花が咲くこともある。音楽を聴くだけでなく、その感想を述べ合うことは、音楽により関心をもつことになるであろう。こうした会話も、「音楽についての語り」ととらえることができる。

4. 聴衆にとってのレクチャーコンサート

聴衆がレクチャーコンサートをどのように受けとめているかについて、参加者からご意見をもらっている。まとめると、

- ・普通の演奏会ではなく、演奏者の体験談、苦労話、作曲家の裏話、こぼれ話、逸話などが聞けるから楽しい。
- ・遠方からでも「とよたクラシック音楽同好会」に参加しているのは、解説や話のあるレクチャーコンサートが自分自身の感覚に合うため。
- ・演奏だけでなく、その場の雰囲気、演奏者の話やいろいろな知識を教えてもらうトークが良く、自分のレポートの構成にうまくマッチしててありがたい。（毎回レポートを書く参加者）

- ・名物講師、T先生の話を楽しみにしているファンも多く、自分もその一人である。
- ・話があると音楽がわかりやすいので、今後もこのスタイルを続けてほしい。

以上のように、多くの参加者の意見は、「レクチャー（語り）があると、より音楽が楽しめ、理解しやすい」と書かれており、レクチャーコンサートに肯定的である。音楽だけのコンサートに比べレクチャーコンサートでは、「もっと音楽を楽しみたい」「音楽をわかりたい」という気持ちがより満足させられるから支持されるのであろう。「とよたクラシック音楽同好会」では、普通のコンサート経験も豊富な参加者が多いことから、これは両方を比較した上での意見であると考えられる。

しかし、聴衆の側からのレクチャーコンサート分析として、今後さらに、インタビューや質問紙、参加者のレポートなどにより、詳細な調査・研究が必要であると考えられる。

5. 演奏者にとってのレクチャーコンサート

例会 G のピアニストに、演奏者側が考える普通のコンサートとレクチャーコンサートについてインタビューをした。以下にそのままピアニストの言葉で示す。

○普通の（演奏のみの）コンサートについて

「オーソドックスコンサートは日本の場合、大変な負担がかかります。依頼を受けてコンサートを出来る演奏家はほんの一握り、大抵は自分の勉強・研究のため、或いは履歴に加えるために自主的にコンサートを行っています。会場費、印刷代、音楽事務所へのマネジメント料、宣伝費、雑費など考えると、儲けなどとてもない、損をしないためには親戚・友人・生徒あらゆる知り合い総動員です。当然、事前の練習を削って、事務所やホールとの打ち合わせ、知り合いへのお願いに時間を割かなくてはなりません。まず、演奏以前のストレスが相当大きいです。

大きなリサイタルでは、演奏・雰囲気・立居振る舞い合わせてお客様を惹きつけられること、本番中何が起っても（客席で大きい物音がすとか、鍵盤が汗で滑るとか）それに左右されず、自分の音楽を演奏出来る強さを持つこと・・・など大変なことが多いです。

それでもやはり、ちゃんとした大ホールで演奏出来る事は大きな喜びであり、何事にも代え難い経験です。音響の良い大ホールで、沢山のお客様を前に、素晴らしい演奏をすることは、演奏家としての醍醐味で

あり、夢でもあります。私自身、大ホールでのキチンとしたリサイタルはもう 10 年も行っていません。が、いつの日かまた、大ホールで正式なりサイタルプログラムを演奏出来るくらいの立場に戻りたい・・・というのが密かな願いです。」

○レクチャーコンサートについて

「トーク付きコンサートというのは、いろいろな形がありますが、私は内容の指示を受けず、こちらに任せて頂けるコンサートが好きです。（とよたクラシック音楽同好会のように！）ヨーロッパのように、皆が気軽にクラシック音楽を聴く習慣がまだ根付かない日本では、なるべく沢山の方に楽しんで頂くことを第一目的とし、出来るだけ話の内容を分かりやすくするよう心掛けています。勿論、詳しい方が聴いても楽しい話でなくてははいけませんし、演奏内容も質の良い物でなければいけません。適当なトーク付きコンサートばかり続けると、“演奏の足りない点を、話でごまかしているピアニスト”になってしまいます。

サロンコンサートでは、雰囲気・演奏・お喋り（この順番で）全てを総合的に見てエンターテイン出来ること、お客様に近くで見て（聴いて）頂く息遣いを大切にすること、その場の雰囲気に臨機応変に対処出来るのが、私が念頭におく目標です。

私は、大学院で初めて、『音楽は先生に言われた事を繰り返すだけではない』と気づき、留学して初めて、それぞれの作品には歴史や背景・ストーリーが隠されている事に愕然としました。留学中、時々駐在員の広いお宅のホームパーティーでピアノを弾かせて頂きながら、演奏とお喋りを鍛えられました。私自身は、割合トーク付きサロンコンサートの形が合っているような気がします。」

以上は、何度かリサイタルを開催してきたピアニストの意見である。これを演奏家の代表的なものとしてとらえてみると、演奏家にとって、普通のコンサートとレクチャーコンサートでは、マネジメントや本番の臨み方など、大きく異なることが読み取れる。そして、どちらのコンサートにもメリットがあり、演奏家にとって重要なものであることが理解できる。演奏者が、コンサートについてこのように考えていることは、今後の企画にも大いに役に立つものである。

このピアニストは、「レクチャーコンサート」とは言わず「トーク付きコンサート」と言っている。実際は非常に質の高いレクチャーコンサートであったが、多少の謙遜も含まれているであろう。しかし、これによって、「レクチャーコンサート」と「トーク付きコ

ンサート」の違いにも今後は考慮していくべきだと気づかされた。

6. まとめ

本稿では、アートマネジメントの実践を通して、「レクチャーコンサートと語り」について分析、考察した。

レクチャーコンサートにもいろいろな形態があり、語り手や語りの時間、内容にもそれぞれ違いや個性が見い出せた。それらの違いはあるのだが、根底で共通することは、「音楽を語る」ことも、演奏と同じくひとつの音楽的表現であるということである。語りにも、解説だけでなく、その人の音楽への思いや考え、人生経験などが演奏と互いに作用し合いながら個性的に表現されていた。そして、聴衆は、演奏と語りの両方から音楽を受けとめていた。

また、4と5において、聴衆と演奏者両方のレクチャーコンサートについての考え方を示した。どちらも、演奏と語りのあるコンサートに肯定的である。聴衆の希望と演奏者の目指す方向性がほぼ同じで、両者にとってレクチャーコンサートが意義のあるものだと明らかになった。しかし、演奏者には、自分自身に対して厳しい姿勢が見出される。レクチャーコンサートでは、「質の高い演奏でなければならない」、「話の内容は、初心者だけでなく詳しい人が聴いても楽しいものでなくてはならない」と自らを律している。

アートマネジメントの実践において、聴衆と演奏者のどちらの立場に立つべきかで悩むことがある。楽器や椅子の配置、音響、空調の温度など、両者の希望が異なる場合が多々ある。こういった場合、音楽だけのコンサートは、最初から最後まで、聴衆が意見を言う機会はほぼない。わからないのに質問もできない。そのため、苦痛を伴って音楽を聴くコンサートは意外に多いのが現状である。その点、サロン風のレクチャーコンサートは、演奏者と聴衆の距離が心理的にも近く、お互いに反応を見合って言葉もかわせるため、一緒に作っていけるコンサートとすることができる。「とよたクラシック音楽同好会」では、休憩のティータイムでも、参加者や講師が気楽に語り合える場を提供しているので、より音楽が身近になる。「語り」が音楽を近づけ、さらには、音楽を広めていくことにつながるのではないかと。

結論として、レクチャーコンサートにおける音楽家の演奏や語りから、聴衆がより深く音楽を受け止め、それを聴衆が自分の感想や思いとして「語る」（時には「文章に書く」）ことによって、音楽がさらに成長

し広がっていくということである。さらにこのことは、クラシック音楽を中心とした音楽界の発展にも寄与するであろうと思われる。

しかし、音だけを媒介にして音楽を伝えるのが従来のコンサートであり、今も主流である。そこに語りを入れることによって、音楽の流れが中断してしまうのではないかという危惧もある。また、語り手の説明の曖昧さや思い入れの強さがある場合、本来の音楽の解釈を曲げて伝えてしまう怖れもある。音楽に解釈をつけることによって、聴衆の想像力を奪ってしまうことも考えられる。そのようなレクチャーコンサートのマイナス面も考慮した研究が、今後の課題であると考えている。

注釈

(1) 広辞苑第六版 岩波書店 2008

また、狭義では、合奏、合唱あるいは数人の独奏者や独唱者の出演する会がコンサートといわれ、独奏や独唱によるものはリサイタル、2人以上の共同による場合はジョイント・リサイタルとよばれる。(クラシック音楽事典 平凡社 2001)

(2) Google による検索 (2009年8月21日現在)

(3) 現在までに筆者が企画を手掛けたり、聴衆として参加したレクチャーコンサート、またはテレビ・ラジオ・インターネット等のメディアによるレクチャーコンサートやその情報を調査した。

(4) 広辞苑第六版 岩波書店 2008

(5) 小川光彦・美山良夫「アート・マネジメント教育の展開—慶應義塾における教育と研修の現場から(アート・マネジメント)」Booklet 3 pp.32-42 慶應義塾大学アート・センター 1998

(6) TOYOTA ART MANAGEMENT「アートマネジメント事始め」宮崎 刀史紀

<http://www.nettam.jp/main/03power/05intro/management/01/index.html>

(7) 蓄音機用レコード (standard playing) のこと。

(8) EMG9 型 (1920年製)、ビクトローラ 1-90 型 (1927年製)

参考文献・資料

- ・二宮 洋「レクチャー・コンサート・シリーズに見出す、いくつかの文化的問題」東海大学文明研究所 Civilizations (7) pp.60-65 2005
- ・伴谷 晃二「レクチャー & コンサート『距離との対話』(広島芸術学会創立二十周年記念事業)」藝術研究 (20), pp.117-119 2007
- ・とよたクラシック音楽同好会ホームページ <http://www.7a.biglobe.ne.jp/~t-classic/>